出席者略歴

ふじおか・ただはる＝一九二六年生まる。東京大学文学部卒業。現在神戸大学文学部教授。主要著書は『平安和歌史論――三代集時代の基調――』（桜楓社）『和泉式部日記』（小学館）共著『日本文学の歴史』（角川書店）など。

かたぎり・よういち＝一九三一年生まる。京都大学大学院修了。現在大阪女子大学教授。主要著書は『伊勢物語の研究』（明治書院）『中世古今集注釈書解題』（赤尾照文堂）『小野小町追跡』（笠間書院）など。

ますだ・しげお＝一九三五年生まる。京都大学文学部卒業。現在梅花女子大学助教授。主な論文は「古今集の抒情と表現」（『国語国文』昭和41・8）「古今集の表現――その知巧性遊戯性について――」（『国語と国文学』昭和50・9）「古今集の勅撰性」（『梅花女子大文学部紀要』4）など。

こまちや・てるひこ＝一九三六年生まる。東京大学大学院修了。現在東京学芸大学助教授。主な論文は「拾遺集の本質」（『国語と国文学』昭和42・10）「源氏物語の和歌」（『源氏物語講座』①）「古今的自然の表現性」（『和歌文学の世界』③）など。

ふじひら・はるお＝一九二三年生まる。早稲田大学文学部卒業。現在早稲田大学文学部教授。主要著書は『新古今歌風の形成』（明治書院）共著『歌論集』（小学館）『和歌鑑賞辞典』（東京堂）『古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集』（角川書店）など。

司会者の諒解により検印を省略します　512

シンポジウム日本文学 2

古今集

昭和51年 2月20日　初刷印刷
昭和51年 2月25日　初刷発行

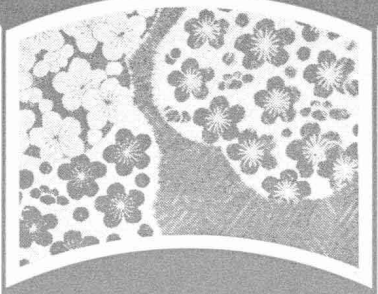
司会者　藤岡忠美
発行者　鶴岡阯巳

発行所　株式会社　學生社
東京都千代田区麹町局区内九段南 2―2―4
電話03(263)2611(代) 振替・東京1-18870番
編集担当 堀健二郎

落丁・乱丁本はおとりかえします
Printed in Japan

埼玉県立図書館
41085320

『シンポジウム』日本文学 ②



古今集

岩波書
藤岡忠美（前出）
片桐洋一
増田繁夫
小町谷照彦
藤平春男

学生社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

出席者

藤岡忠美〈司会〉

片桐洋一

増田繁夫

小町谷照彦

藤平春男

装幀

杉浦康平＋鈴木一誌

〔シンポジウム〕日本文学——古今集・目次

第一章　「仮名序」からみた『古今集』撰集の意図

《報告》　片桐洋一

「仮名序」と『古今集』との関係　「仮名序」の第一の部分について　第二の部分について　第三の部分について　第四の部分について　第五・第六の部分について

「仮名序」の冒頭と貫之の文学観 …… 三一
「人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける」 …… 三四
和歌の呪術性と晴の歌 …… 三七
和歌の効用 …… 四〇
六義の分類と貫之の「遊び」 …… 四三
「仮名序」の文体 …… 四七
「ならのみかど」と人麿 …… 五〇
序文の本文の問題 …… 五四
いわゆる「国風暗黒時代」 …… 五六
六歌仙の批評 …… 六〇
平城天皇 …… 六四
和歌と政治史 …… 六六
千歌二十巻 …… 六九

第二章　紀貫之をめぐる諸問題

《報告》　藤岡　忠美

貫之と屏風歌との関係　『古今集』の和歌の配列　『古今集』以後の和歌の動向と貫之

屏風歌の「虚構性」……八四
屏風歌の画中人物と貫之……八九
屏風歌の韻律性と叙景歌性……九五
貫之の歌風の変化……九九
『古今集』の和歌配列法について……一〇四
「構造論」の功罪……一〇六
『古今集』の構造における人事的要素……一〇九
恋歌仕立ての贈答歌……一一三
「小世界」と兼輔と貫之……一一四
「年ふればよはひはおいぬ……」の歌をめぐって……一一八

第三章　『古今集』の表現

《報告》　増田　繁夫

素材と題詠性 ――『万葉集』と比較して――　素材・作者・主体性　人生観・世界観の表白度　歌の底に沈む諦念　『古今集』の二元性　知巧性と〝遊び〟　対象への〝やさしさ〟　晴の歌と褻の歌

『古今集』歌の〝やさしさ〟……二二七
二元的要素の扱い方……二二九
和歌における技巧の意味……二三三
晴と褻の問題……二三六
「年のうちに春は来にけり……」の歌をめぐって……二三七
懸詞と縁語……二四一
一　小野小町の歌……二四三
二　素性の歌と修辞……二四九
序　詞……二五三
一　序詞の表現機能……二五四
イメージの鮮かさ……二五八
一　「吉野川……」の歌のイメージ……二五九
二　「谷風に……」の歌のイメージ……二六一

繊細さ……一六三
一　「秋来ぬと……」の歌……一六四
二　「秋はきぬ……」の歌……一六六
恋の歌……一六八
一　「夕暮は……」の恋歌……一七〇
二　「わが恋は……」の恋歌……一七三
無常の歌……一七四
一　業平の「さくら花……」の歌……一七五
二　友則の「寝ても見ゆ……」の歌……一七七

第四章　『古今集』的表現の特質とその展開

《報告》　小町谷　照彦

『古今集』の言語的な特性　自然把握の問題　自然把握の五つのタイプ　季節感・時間意識の問題　歌枕の問題　恋歌の慣用表現　贈答歌の実態　『古今集』的表現形成の背景

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

自然把握のタイプについて……一九四
『古今集』的表現の特色……一九七
『古今集』的配列……二〇〇
『後撰集』・『拾遺集』の配列……二〇三
歌枕をめぐって……二〇六
『宇津保物語』と『和泉式部日記』の贈答歌……二一〇
行事的和歌と文芸的和歌……二一四
勅撰集の中の恋歌……二一七
『古今集』和歌成立の基盤……二一九

あとがき……二三五
解説・注……二三七
参考文献……二三六
作者・作品索引……二三八
和歌索引……二四一

古今集

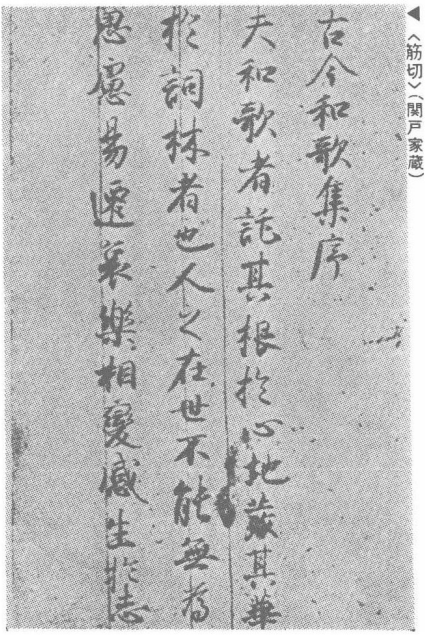
第一章 「仮名序」からみた『古今集』撰集の意図

《報告》 片桐 洋一

「仮名序」と『古今集』との関係

『古今集』の「仮名序」というのは普通、文学論・歌論として評価されているわけです。たとえば、『日本歌学大系』にも、『古今集・仮名序』という形で、他の歌学書と並んで入っています。しかし、これは歌学書ではない、勅撰集の序文であるということを、当然のことなのですが、忘れてはいけないと思います。だから『古今集』成立の基盤とか背景とか編纂の意図といったものをあわせて考えないといけないと思うのです。また『古今集』編纂を、いわば正統化するための文章なのですから、書いてあることを全部をそのまま真として受けとってしまうということも問題があると思います。同時にまた、これも当然のことですが『古今集』の和歌のあり方というものと結びつけて考えないといけない。こういうわけで「仮名序」をくわしく検討してゆくことは、結局『古今集』全体を論ずることになってしまうのですが、あんまり総論的にやってしまうと、後の報告がやりにくくなってしまいますので、私は具体的に「仮名序」の文章を検討してゆきたいと思うのです。その前にいちおう簡単に私の立場みたいなものを申しておこうと思います。

さきにも申しましたが、『古今集』全体と「仮名序」というものがまったく有機的に結びついていると思うのです。『古今集』全体の精神と本質が、「仮名序」の内容と表現に堅く結びついていると私は思うのです。たとえば、「仮名序」を見ると、昔は非常によかった、「古の世々の帝の時代」には、和歌が非常にすぐれていた。昔の和歌はよかったのだというふうに書いています。確かにそれはそれでいいのですけれども、同時にこれは昔は栄えて、いまは衰えているという末世的な把握……（末世思想というのは、どのあたりから、どういうふうに形成されくるかというのは問題ですけれども）を基礎にした文学観ないしは価値観、言いかえれば、精神史的な趨向が深く及んでいると思うのです。そういうものが『古今


古今和歌集序
夫和歌者託其根於心地藏其華
於詞林者也人之在世不能無為
思慮易遷業樂相變感生於志

◀〈筋切〉（関戸家蔵）

集』の和歌一般に見られます。たとえば、「わが身よにふるながめせしまに」というように、わが身を時間的な移ろいの中において客観的に把握し、それを「時の移ろい」一般のこととして詠嘆するといういい方が、勅撰集の序文としてかなり大上段にふりかぶった「仮名序」や「真名序」の中にも抜きがたく存在していると思うのです。ただ、昔はよかったと書いてあるからといって文字どおりに客観的叙述として、それをそう受けとるだけではすまないものがあるのではないかと思うのです。

それでは、今申しましたような姿勢で「仮名序」を六つに分けて具体的に見ていきたいと思います。

「毛詩序」ト　子夏

關雎は后妃の徳なり。風の始なり。天下を風化して夫婦を正す所以なり。故に之を鄉人に用ひ、之を邦国に用ふ。風は風なり教なり。風して以て之を動かし、教へて以て之を化す。詩は志の之く所なり。心に在るを志となし、言に發するを詩となす。情中に動いて言に形る。之を言うて足らず。故に之を嗟歎す。之を嗟歎して足らず。故に之を永歌す。之を永歌して足らず。手の之を舞ひ足の之を蹈むを知らざるなり。情聲に發し、聲文を成す。之を音と謂ふ。治世の音は安んじて以て楽む。其政和すればなり。亂世の音は怨んで以て怒る。其政乖けばなり。亡國の音は哀んで以て思ふ。其民困めばなり。故に得失を正し、天地を動かし、鬼神を感ぜしむるは、詩より近きはなし。先王是を以て夫婦を経し、孝敬を成し、人倫を厚うし、教化を美にし、風俗を移す。故に詩に六義あり。一に曰く風、二に曰く賦、三に曰く比、四に曰く興、五に曰く雅、六に曰く頌。上以て下を風化し、下以て上を風刺し、文を主として譎諫す。之を言ふ者罪なく、之を聞く者以て自ら戒むるに足る。故に風といふ。王道衰へ禮義廢れ、政教失し、國々政を異にし家々俗を殊にするに至りて、變風變雅作る。國史得失の跡を明にし、人倫の廢を傷み、刑政の苛を哀み、情性を吟詠して以て其上を風し、事變に達して其旧俗を懐ふ者なり。故に變風は情に

「仮名序」の第一の部分について

第一段は「やまとうたは」から「男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり」までです。全体から見れば非常に短い部分ですけれど、和歌というものを『古今集』の撰者がどういうふうに考えていたかという和歌の本質と、あるいはどうあるべきだと考えていたかという和歌の理想が非常によく出ていると思います。つまり『古今集』撰者、ないしは貫之の「和歌観」というものが非常によく出ていると思うのです。「言の葉」というのは和歌ですが、「万の言の葉」とありますように、できあがった和歌は種々さまざまですけれども、しかしその出発点は何かというと、「人の心を種」にしているわけです。だから根本はやはり「人の心」から出ているのです。すでに種はまかれているわけで、つまり人間である。あるいはこれをもっと広めて「生きとし生けるもの」、動物あるいは生物全体、だれしも歌を詠むのだというところから出発しているわけです。これは「毛詩序」に、「詩に志の之く所なり。心に在るを志となし、言に発するを詩となす。情中に動いて言に形る」という、心の中で動いているけれども、そのまま心の中にあるものを志ということばとなって、外にあらわれたものが詩であると言っているのを典拠にしているということは、すでに平安時代からいわれていることですが、中国のそれを

発して禮義に止る。情に発するは民の性なり。禮義に止るは先王の澤なり。是を以て一國の事、一人の本に繋くる、之を風といふ。天下の事を言ひ四方の風を形す、之を雅といふ。雅は正なり。王政の由りて廢興する所を言ふなり。政に小大あり。故に小雅あり大雅あり。頌は盛徳の形容を美し、其成功を以て神明に告ぐる者なり。是を四始といふ。詩の至なり。然らば則ち關雎、麟趾の化は、王者の風なり。之を周公に繋く。南とは化北よりして南するを言ふなり。鵲巣、騶虞の徳は、諸侯の風なり。先王の教ふる所以なり。故に之を召公に繋く。周南、召南は正始の道、王化の基なり。是を以て關雎は淑女を得て以て君子に配するを樂む。憂賢を進むるに在り、其色に淫せず窈窕を哀み、賢才を思ひて、善を傷るの心なし。是れ關雎の義なり。

（『国訳漢文大系』「文選」より）

そのままとったというのではなく、やはり貫之自身もそのように考えていた。つまり貫之自身、中国文学の影響はもちろんありますが、それを受けいれる余地、姿勢というものがあったと考えるべきだと思うのです。そうでなかったら「心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言び出せるなり」という次の文章に続いていかないように思われます。つまり一つの人の心から生まれた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com